

日本医師会災害医療チーム（JMAT）に参加して

岩手県大槌町



活動期間

平成 23 年 5 月 11～13 日

支援場所

岩手県大槌町 大槌高校救護所

参加メンバー（第 3 次派遣隊）

石崎 仁	薬剤師	(株式会社町田アンド町田商会	サカエ薬局田面木)
肥後 佳範	薬剤師	(株式会社町田アンド町田商会	サカエ薬局金木)
工藤 源造	総務担当	(株式会社町田アンド町田商会	福祉サービス課課長)
佐藤 栄	総務担当	(株式会社町田アンド町田商会	農事営業部係長)

避難所の状況

弊社における第二次支援隊が JMAT（医師会災害医療チーム）の一員として活動した 5 月 3～7 日の大槌高校避難所における避難者は 245 名であったが、今回の第三次支援活動では 238 名（うち 5 歳以下は 3 名）とあまり変動がなかった。大槌高校避難所は、居住空間がカーテンで仕切れプライバシーが守られていること、1 日 3 回の食事も不足なく提供されていること、比較的居心地がよく、仮設住宅がまだ出来ていないことなどが、避難者の変動が少ない理由と思われた。一度救護所を出た方も戻ってくるケースもあるようだ。

食事は、避難所にいる調理師や避難者の手伝いによって調理、配給が行われており、質、量ともに充分と思われた。



また治安も非常に良いことから警察による監視も常駐から巡回になり、避難所内では秩序が保たれた生活が続いていた。



避難所の保健衛生

チーム引き継ぎ前日の 5 月 10 日に発症したインフルエンザの患者さんは翌日には解熱し、保健師さんの提案により隔離されていたため流行には至らなかった。避難所内では継続的に愛知県の保健師チームが活動していた。他の避難所で感染性の胃腸炎の発生が数件見られたため、保健師さんから嘔吐物の処理に使う消毒薬を用意しておく提案がなされ、薬剤師が次亜塩素酸希釈液を 2 日毎に作り替えておくことになっていた。私たちもこの消毒液を調製したが、支援滞在期間に使用することはなかった。

消毒液の調製はすぐに出来ることや感染性胃腸炎が大槌高校避難所では発生していないこと、また嘔吐物処理について保健師さんが対処法の講習会を開催するなどして保健衛生の意識が高く保たれていた。以上から次の医療チームへは、必要時の調整でも問題ないと申し送った。

しかし、これはあくまでも避難所内での衛生環境であり、地震・津波で床上・床下浸水などの片付けをして自宅で生活を続けている方の衛生、健康状態は未だに把握しきれてはいないようだ。今後の課題としては周辺住民への聞き取りに重きを置くことも必要と思われる。



復興に向けて瓦礫処理が急ピッチで進められているが、これから夏場を迎えることになり、気温上昇と粉じん、多湿によるカビの発生、害虫の異常発生など人体にとって悪影響を与える要因が増えてくることは必至だ。少なくともマスク着用は必要であり、瓦礫撤去に加え衛生環境を整える対策が必要だ。

JMAT による救護所活動

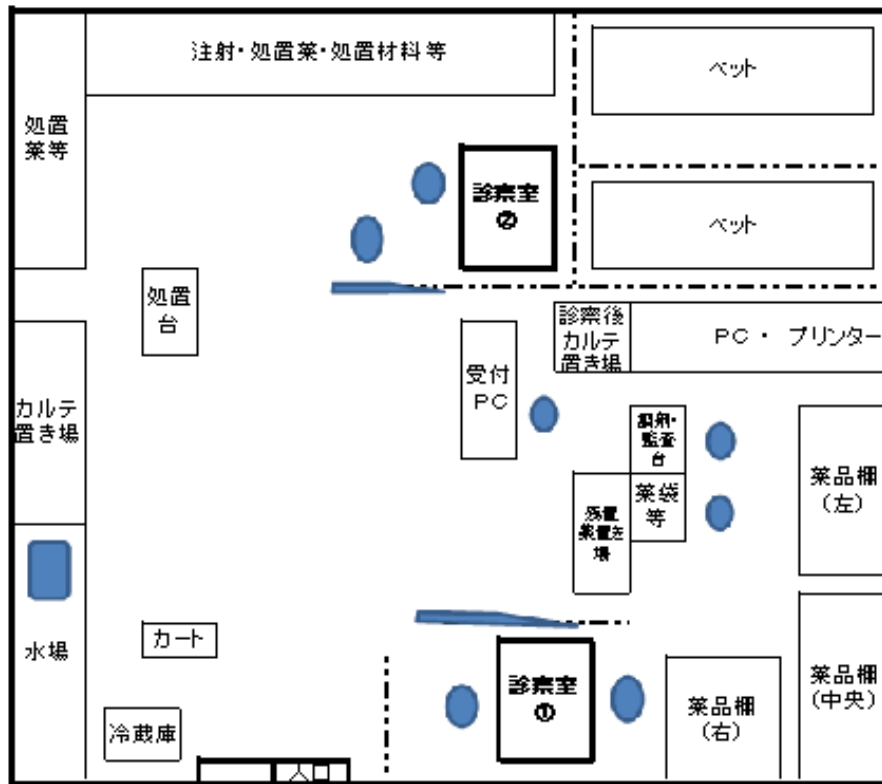
第二次派遣隊（5月3～7日）の支援活動時に比べて、救護所外の医療機関へ患者さんを紹介することが増えてきた。避難所内や近隣に住む患者さんを、再開した保険医療機関へ誘導することが重要になってきているためだ。従って、救護所内での調剤行為が少なくなり、救護所外処方外部薬局から届けられた薬を患者さんに説明する業務が多くなって来た。

医薬品調達については、被災した製薬会社も少なからずあり、流通上の問題からもまだ代替薬の対応が必要であった。他県チームが撤退し、青森県チームが単独の診療となっても医師とのコミュニケーションをさらに密にしていく必要があると感じた。

医師当直時の受診者は、緊急性が低いと思われる軽症患者が主であった。医師が窮屈な部屋で待機する当直ではなく、必要時に携帯電話などで呼び出す方法に変更することで、負担は軽減されるものと思われた。

診療所内レイアウトは、第二次派遣隊と今回第三次派遣隊との間（5月7日～5月10日）に変更があった。

保健室（救護所）に入ってすぐ右に診察室①、奥のベッド手前に診察室②を配置し、プライバシーに配慮するためパーテーションで仕切り、ベッド周りはカーテンで遮断した格好になっていた。



(救護所診療所内のベッドの配置)



診察室 ②



診察室 ①



現在の医薬品在庫は、主に医師会や大阪府薬剤師会からの寄付であるため在庫は増やさない方針に変わりはない。同効薬の在庫でやり繰りして、撤退時には開封済み医薬品は廃棄する方針と聞いた。使用医薬品の種類を増やさないよう薬剤師による代替薬提案が引き続き必要である。

開封済み医薬品の廃棄については、水剤や散剤の瓶、錠剤のバラ包装品でなければ他での使用は可能と思われた。個人的には、これまで薬剤師が管理してきたことを考えると、有効利用が可能であると思う。

薬剤師にとって、代替薬の処方提案、医薬品の在庫管理、患者への服薬指導は、今回特に重要性が高かった業務だ。

今回は、薬歴簿の設置がなかったため、カルテへ服薬指導内容を記載することを医師から許可を得て行った。患者情報を医師と薬剤師で共有できるため有用と思われた。

しかし、長期日数処方の場合、次の受診は医療支援チームが撤退後になる可能性もある。撤退時にはカルテを保険医療機関に引き継いでもらえれば、今後も有効に利用できると思われる。

また、救護所内だけでなく避難所や周辺住民への医師の往診もあり、薬剤師も同行することができればさらに幅の広がった業務ができたのではないかと感じた。

チームの生活環境・食事について

宿泊所は、今回物理室へ移動していたが、これまで同様に炊事も兼用できる部屋であるため、最適な場所であると思われる。

釜石へ出向けば入浴が可能であるが、復興活動をしている作業員やボランティアも大勢利用しているため相当混み合っているようだ。

天候や気温にもよると思うが、就寝は半袖に寝袋で十分だった。津波による水たまりや汚泥など害虫の発生する要因が多く残っており、蚊やブヨなどによる虫さされなど今後十分注意する必要がある。

食事については同行の総務担当者に非常に助けられた。炊事や片付けは、事前に医師・看護師・薬剤師・総務担当のチーム全員で話し合い役割分担しておくことによってスムーズに行うことが出来た。



前の医療チームから引き継いだ食材は驚くほどあり、これを避難者へ差し上げてはどうかという意見もあった。しかし、避難者全員に渡らないのであれば不公平になるので受け入れられないという管理者からの話だった。

そのため残った食材は、積極的にメニューに盛り込んで消費していくことにした。



大槌町の医療の現状

以前から医師が不足していた大槌町には、現在青森と沖縄（5月いっぱい撤退予定）・長野（5月14日で撤退）の医療チームがおり、さらに4つの診療所が仮設ながらも再開されたため、一時的に医師数が過剰とも思われる状態にある。その中で大槌病院仮設診療

所が6月1日に床面積約140坪の規模で移転し診療をはじめの予定であり、救護所受診の患者さんを保険医療機関へ移すことを災害対策本部から要請されている。

特に、慢性疾患を持つ患者さんを、再開された診療所へ紹介することが多くなっている。

しかし、現在でも大槌高校には240名弱、城山体育館（公民館）には350名程度の避難者がいる。周辺の方も含め多くの方は車も無く移動手段がないため、避難所から診療所へのバス路線の配備等が今後の課題だと思われた。

おわりに

わずか二泊三日の短い滞在期間ではあったが、避難所の方と話をしていると、医療スタッフが常駐しているため、必要な時は直ちに医療を受けられるという大きな安心感を与えることが出来ているという思いを強くした。

医療チームの存在価値は高いが、再開し始めた保険医療機関に患者を誘導していかなければならないため、今後救護所は縮小、撤退していくことになる。

高い必要性を感じながら、縮小、撤退していくことは、個人的にはまだ時期が早すぎるように思われてならない。

被災地での保険診療への移行は未だ律速段階であると思われる。

患者を一気に移行するのではなく、避難所救護所と再開された医療機関とで連携し、患者の罹災状況も考慮しながら進めて行くことが必要ではないだろうか。

大槌町の復興は目を見張る早さで進んでいる。そして、そのスピード同様に被災者のニーズも日々変化していることが感じ取れた。そのニーズに対して自分たちチームは微力ながら対処を試みたが、今後の弊社支援チームにも継続的な活動を期待したい。

JMAT 活動を通じて、被災された皆さんの生活環境がさらに改善され、健康が守られながら、被災地が1日も早く復旧・復興されますことを心よりお祈りいたします。

謝辞

今回お世話になった方々へ

福田医師と十和田中央病院チームの皆さま

丁寧な引き継ぎありがとうございました。熱心な説明をして下さった奥山薬剤師、帰られた後も携帯電話で問い合わせや確認をさせていただきました。お忙しい中、本当にありがとうございました。

松原医師とチーム松原の皆さま

今回一緒に仕事をさせていただいた青森チームリーダーの松原医師、赤平看護師長さん、松井看護師さん、皆様の心の温かさを感じながらお陰さまで私たちは任務を無事に終了できました、本当にありがとうございました。

また何かご一緒に仕事が出来ることがありますことを願っております。



奥泉医師とチーム奥泉の皆さま

長野チームとして最後の任務お疲れ様でした。

初めてお会いしたとは思えないように接していただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

東御市に戻られてもお元気でご活躍ください。

町田アンド町田商会社員の皆さま

朝早くから集まってのお見送りありがとうございました。

皆様のご支援、ご協力のお陰で無事に帰ってくることができました。

皆さんの声援が岩手に届いているかのようなようでした。ありがとうございました。

町田社長へ

このような貴重な機会を与えてくださり、有意義な経験をさせていただきました。

大変有難うございました。

今回の支援活動にお力添えをいただきました皆様に深く感謝致すと共に、心より御礼申し上げます。